―斬影―

霧崎 邪駒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
―斬影―

【Ｎコード】
Ｎ９３３６Ｇ

【作者名】
霧崎　邪駒

【あらすじ】
ふつうの光陽高校一年、俺、橘龍斗（タチバナ・リュウト）ある日俺の中から声がした。
その声に体を乗っ取られて歩いた先には、イジメの現場だった・・・
そしてイジメられていた子は怪物になった！？
俺は、声もう一人の俺（前世）と共に、絶望に陥った生徒がなった怪物と謎の敵に立ち向かう！――――――――――――斬影―（キリカゲ）――――――
涙あり、笑いあり、恋愛ありの魂属性バトルストーリー

※前世が歴史に沿っていません。

第一話　俺　前編（前書き）

この話はいくつか修正しました。
あと更新はかなり亀になってしまいますのでよろしくお願いします。

第一話　俺　前編

おい・・・聞こえるか俺の声

お前は苦しんでいる

お前はごまかしている

お前は自分のことを知らない

お前に何かが抜けているのを

聞こえるか・・・俺の声

お前はお前で生きていけ

たとえ何か失っても

生きる道を・・・

見つめ続けろ

＋斬影＋

第一話「俺」

「ん？うんー朝？」俺はベッドから起き上がる

「またあの夢・・・・・・・・・・」

最近俺は変な夢を見ていた。
俺は真っ暗な黒の中にいて男の声が聞こえる夢。
俺にもよく分からないけど、なんだかその声は懐かしい声だった。

「俺に抜けているもの？」

分からない。でもいつも俺には何かがないような気がしていた。
それにしてもあの男の人誰？

「あああ！メソメソしてても仕方ねぇか」

頭をわしゃわしゃと掻きながら俺はテレビを付けた。
にしても豪華すぎるだろ。一部屋一台とか・・・一応ここ寮だぞ。
天気予報は曇り。
湿った5月の曇り空・・・・
俺はニュースを見ながら制服に着替えた
黒いネックのアンダーに黒に黄色のラインのはいった学ラン
黒すぎるかみは解いたけど
ツンツンしている。
最後に右目に眼帯を着けて準備完了！

「よし！さあ朝飯でも食いに行くか！」俺、橘　龍斗（タチバナ・リュウト）。
周りの奴は俺の事不良とか言うけど

俺は見た目以外は普通の高校一年生だ。
それにしてもあの夢は何なのだったんだろう。
俺はそんな事を考え食堂に入りカウンターまで行った。

「おはよう。龍君！」

「おはようございます！おばさん、Ｂ定食下さい！」

いつも通りおばさんから朝食をもらい席を探す。
このおばさんとても優しいんだよね。

「龍斗・・・・ここ・・・・・」

ふと無愛想な声が聞こえた。
振り向くと肩まで伸びた金髪の青年が片手をあげて呼んでいた。
「おはよう！零兄！！」　神崎（シンザキ）　零（レイ）俺より一つ年上で高二
俺とは幼なじみで俺にとって兄貴的存在で頼りになる。

「・・・・・・・おはよ。」

とてもめんどくさがりなので、やっぱり最低限のことしか喋らない
んだよな；。

取りあえず、零兄と向かい合わせに座り朝食を食べ始める。

・・・・・・・・「スズゥウ」・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・「

ムシャムシャ」・・・「ゴクゴク」・・・何か喋ろよ！！！！！！！！！！！！！！

零兄が零兄なので、会話が成り立たない。

むしろ無い！！！！

静かすぎて俺からしたら気まずいわ！！！！！！！！！！！

心の中で叫びながら、ただ、ひたすらに食べているとブラウンの髪で風紀委員の腕章をつけた少女がこちらに向かって来た。

「おはよう。零兄、龍斗。」

「おはよ。」

「おはよう。奈美！」

魔谷（マタニ）　奈美（ナミ）

コイツも俺の幼なじみ
成績優秀の風紀委員で、一番美人で一鬼一な風紀委員である。。

「何か逝った？」

ギロッとした目でこちらを睨んで声だけ笑いながら迫ってくる。

タンマ！マジでタンマ！！
決して何も言ってないです！
ただの心の呟きです！
エスパー！？しかも字が違うから！

「心の中のツッコミも程々にね？」

「はっはい！」

こっ怖ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！笑ってんの声だけだよ！

ビクビクしながら俺は味噌汁をすすった

「おっはよう！！龍兄！！！」

「はばぶぅうううううう！！！！！？？？？？？」

いきなり後ろからクリーム色の髪をした少年が、
俺に抱きつきと云う名のタックルをしてきた。

俺はその衝撃により味噌汁を吐いてしまい、前に座っていた零兄に
ぶっかけてしまった。

「ゲホッゲホッ！ゴホ！何すんだよ！？祢音！！！！！！」

「あっはぁ→朝の挨拶だよ～」

園田（ソノダ）　祢音（ネオン）

俺の親友の一人
見ての通り幼い性格をしている。
しかも同い年なのに俺のことを〔龍兄〕と読んでいる。
とても純粋な子供みたいな高一である。

それよりも・・・・・・・・・・・・・・・・・

「零兄、大丈夫か？」

「・・・・・・問題ない。」

いやいやいやいやいやいや！？
顔ベッタベタですけど！？
ワカメが金髪に付いてますけど！？
零兄は何事もなかったかのように顔を拭き始めてるし・・・・・・・
・
奈美がいきなりテーブルにドンと手をついた。

「そんな事より！」いやそんな事よりじゃあないでしょ。
ある意味今一大事だからね・・・・・・奈美さん

「アンタさあ、最近女の子襲っている不良知らない？」

「は？何で俺に訊くの？そもそもどんな意味での襲うですか？」

男が女の子襲うのって色々あるでしょ。危ない世の中なんだから

「・・・・・・変態」

ボソッと奈美が言う。

「変態じゃねぇよ！

しかもそっち系一つもいってねぇよ！！！！！！！！！

お前が紛らわしいこと言ったからだろ！！」

「何言ってんの？馬鹿

襲うって言うならリンチに決まっているでしょ！？

この変態！！！！」「女子高生がそんなぶっそいなこと言うな！！

だいたいそんなの決まってねぇーよ！！この阿呆男女！」

「阿呆はアンタほどじゃないわよ！！馬鹿黒尽くめ変態！！！！！！

！」

―リン―

『またか・・・・・・・・・』

ふとここにはない溜め息混じりの声が聞こえた。あれ・・・・・・・

気のせいか？

「・・・・・止めろ。
それで何故それを聞いたんだ？」

いつも通りの口喧嘩に見かねた零兄がそれを制す。奈美はそうだったというような顔でそれに答えた。

「それがね、
うちらのクラスの土屋さんが最近傷だらけなの・・・
しかも増えてるような気がする。
本人に聞くのも答えてくれないだろうし、
それで一番不良っぽいアンタに聞いたわけ。」

「たしかにルレちゃん最近元気無いよね・・・・・・・」

祢音が心配そうに目をウるわせ奈美見る。

今話題になっているのは成績トップの土屋　ルレについて。

最近ん～と
ちょうど海王寺　凜華　（カイオウジ　リンカ）が転校してしばらくしてからか？
確かに様子がおかしい。

「それでアンタなんか知らない？」

「いや別に知らねーよ。
俺全ての不良を知ってるわけじゃない。
それに俺不良じゃねぇよ！！！」

「その格好が不良に見えるの！」

「何だよ！それ！！！
人を格好で決めんな！！！！！
お前だって！風紀委員のくせにミニスカじゃんか！！」

「・・・・いいのか・・・お前ら。」

突然の声にテーブルの方を見ると
座っていた零兄が困った顔（他の人から見れば無表情）で
俺たちを見上げていた。

「今８時２０分・・・・・・」

時計を見ると零兄の言う通り
８時２０分でここから学校まで１５分
学校が始まるのは８時３０分

「やべえぇえええええ！！！！！」
やべぇよ
うちの学校光陽高等学校では、遅刻すると体育の先生に授業の時腕
立て伏せを１５０回やらされる。
今時の学校では禁止されている体罰だ。

「はっ早くいっ行きましょ！！」

奈美は鞄をブンブン振り回しながらパニクっている。

「僕腕立てするのいやだ～！」

「早く鞄持て・・・・・まだ間に合う。」

零兄は今にも泣き出しそうな祢音の頭を撫でて鞄を渡す。
まるで兄弟みたいだな。
って見とれている場合じゃない！
俺は鞄を持って玄関まで行き靴シューズを履く。
それを見た奈美と祢音は慌ててスニーカーを履いた。
零兄は落ち着いた手付きで靴を履く。

「走るぞ。」

いつも通り
楽しい毎日

零兄、奈美、祢音、とすごす日々

平和という名の楽園

でもそれが崩れ落ちてしまうことを俺は知ってる。『今日も平和だな・・・・・・』

ん？またあの声？

俺はそれを気にせず走り続けた。

この先この声が

平和の崩壊と

戦いの始まりと

以前の俺の記憶と

新たな出会いの発端とは気付かずに

第一話　俺　中編　一（前書き）

更新が遅くなってすいません。これからは2ヶ月以内には書くつもりです。

次回の話はいじめ表現が入っていて暗いです。
いじめが入ってないと始まらない小説ですがひどいのは多分この話だけです。
別に飛ばしてくださって結構です。

それでは第一話　中編　その一　お楽しみ下さい。

第一話　俺　中編　一

はあ・・・・・・
俺は何故運が無いんだろうか。あのあと俺達は全力疾走で学校に向かった。
だが俺だけ一秒差で遅刻
理不尽な筋トレをさせられてしまった。
何で俺だけ！？しかも一秒差だ！！一秒差！！
しかも今日日直なんだぜ

「橘君　終わりましたか？」

さっき話題になっていた土屋が黒板を消している俺に声をかけた。
ちなみに俺の名字は橘。
土屋の出席番号は俺の次
つまり俺と一緒に日直している。

「いやまだだけど。」

「そうなんだ・・・・・わたしゴミ捨てにいくね」

彼女は辛そうな笑顔を俺に向けてゴミを大きいゴミ捨て場に捨てにいった。
最近やっぱり土屋のようすが変だ。

ーーーーーールレ視点ーーーーーーーーーー

橘君は優しい。
何か自然と馴染める感じがする。でも巻き込みたくない。
私は早く帰るためゴミ捨て場に足を急がせる。クルリと学校の奥を廻ってゴミ捨て場がある。
誰も居ない・・・・・・良かった。

「土屋さぁん☆」

いやな声が聞こえた。
恐る恐る後ろを振り向くと、海王寺さんがとても嫌な笑顔で取り巻きの女子４人をひきつれていた。

「か・・い・・王寺・・・さん？」

私はショックでコトッとゴミ箱を落としてしまった。

「まだぁ～学校にぃ来てたんだぁ」

海王寺さんは私に歪んだ笑みを向けて私のお腹に思いっきり殴ってきた。

「かはっ」

「もぉーそれくらいで倒れないでよぉ。」

そう言うと私が落としたゴミ箱を私にぶっちゃけた。

「これからなんだからぁ♪」

それを合図に他の子達が私を蹴り始めた。

「キャハハV
みんなより賢いからってぇ男の子にちやほやされてウザイよぉ。」

「そうよ！！アンタ成績がいいなんて調子乗りすぎよ！！」

次々と私の耳に入ってくる罵声。

なんで私が何をしたというの？
「死ね！」

「死ねばいいのに」

「アンタなんかぁ死んじゃえばいいのにぃ。」

アンタナンカ死ネバイイ

もう・・・・・こんなのいや・・・・・・

――――――――――――――

土屋がゴミ捨て場に行ってから遅い、

土屋がゴミを捨てに行ってから３０分くらい経っている。
ゴミ捨てて戻って来るだけだよな？
何かあったのだろうか。
気持ち悪い。頭痛い。早く帰って寝たい。
けど土屋置いってたらダメだしな。
さっきから俺おかしんだよ。
胸が痛いし頭もズキズキする。右目が脈打つように痛む

『・・・・スウ・・・・・・・』

まるで俺の中に何かがいるみたいに

しばらくすると痛みは引いた。何だったんだよ。今のは

『おい。あの女行かせてよかったのか？』

え？今俺の中で声がしたよな？
『貴様、俺の話を聞いているのか？』

低くて何だか懐かしい声

「だ・・・・・・れ？」

『俺か？俺はお前だ。』

俺？この声の主は俺なのか？

いやそれにしても違いすぎる。俺は普通より低いけどこんな大人びた声じゃない。

『驚くのも仕方ないか。それよりもさっきから嫌な予感がする。』

俺を置いて話し始める俺と名乗る声
それだけじゃホントになんなのか分からない。

「なあ、だからアンタ誰なんだ？」

『俺はお前だ。取り敢えず時間がない。体借りるぞ。』

また俺を無視した！！

「それだけじゃ分ｋａ・・・悪いな。」

口が勝手に動いた！？
嘘だろ！！なんで！？
俺が声を出そうとしても口は動かない。

「グズグズしていると日が暮れるぞ。」

第一話　俺　中編　二（前書き）

テスト期間も終わりやっと投稿ができました。
遅くなって本当に申し訳ありません。
今回は長いです。
展開が急かも知れません。
もし誤字脱字又はご意見が御座いましたら、感想にてお申し付け下さい。

それでは、―斬影―第一話中編二お楽しみ下さい！

第一話　俺　中編　二

俺は今仏頂面で廊下をスタスタと早歩きしている。
他から見れば今の俺はとても普段の俺とは考えられない顔をしている。
多分ここに誰かいれば何事だ！とか思うはずだ。
だけど今の俺は俺じゃない。
俺は俺の中から聞こえた声、俺と名乗る声に体を乗っ取られてしまった。

あぁあああ！！！　もう！！！
どうなってんだよ！？これは！！！
何度か試したが俺自身がこの体を動かそうとしても動かなかった。
俺は今誰かに声を掛けることも今のこの状況を止めることさえ出来ないのだ。

ヤバい・・・・今の俺が誰かに声掛けられたらどうしよう！？
コイツはあの時俺のことを無視したから、
恐らく零兄と同じ面倒くさがりか自由傲慢な奴だろう。

「何だ。その言い方は。」

今の俺の声無視。
どちらにせよ絶対他の奴も無視する！

「今お前も無視しただろう。」

今の性格違うだろうから、変な奴か嫌なやつに思われる！！！！！

「いや心配するところが違うだろう。」

特に奈美に今の俺に逢ったら、

何？シカト？

とか言ってつかかってきそう！！！！

イッヤだぁあああああああ！！

ぜってぇー見つかりたくねぇえええええ！！！！！

「・・・・・・・・・・・・確かに・・・」

だよな～分かってんじゃん♪

やっぱお前も苦手かぁ。

「さっきの混乱はどうした。

そして意気投合してどうする。」

はっ！そうだった！！

お前ツッコんでないでお「龍斗何そんな怖い顔して歩いてるのよ。」

俺（の体）はゆっくりと振り返った。

するとそこには今一番逢いたくなかった奈美が顔をムスッとさせて

俺（の体）を見つめていた。

何でだよ！！よりによってなんで奈美なんだよ！？

なんかスゲェーややこしくなりそう！？

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？あっ奈美。

お前委員会の仕事は終わったのか？」

なんか間はあったが無視はしなかった。
しかも普段の俺と変わらない喋り方だ。
「アンタこそとっくの昔に日直の仕事終わって帰ってる筈でしょう！！」
なんかもの凄く不機嫌なんですけど・・・・・・・・・・・・・・
「いやぁ、それがさ土屋がゴミ捨てに行ったまま帰ってこなくって・・・・・・・・」
そう言って、冷や汗を流しながら俺（の体）は頬を人差し指で掻いた。
「・・・・・・・・・・・・・・そうなの？そういえば土屋さんも今日の日直だったわね。」
今の間はなんだ。そんなに俺のこと信じられないのか！？
「分かったわ。私も付いて行く。」
「助かる。」
嗚呼今日はいつもよりものすごくスムーズに奈美と会話している。
そう思っていると俺（の体）と奈美は校舎の外に出ていた。
そのまま真っ直ぐに校舎の裏へ向かった。
「い・・・・・・・・・・や・・・て・・・・」

「あ・・・たほ・・・・・・・む・・・・・く」

ん？声が二つ？

俺と土屋以外の日直は帰った筈だよな。

「土屋ぁあ！まだ終わらないのか！？」

俺（の体）はおかしいと思ったのか叫んだ。

・・・・・・・・・・・・・・・返事がない。

急いで速く足を動かす奈美。

「お、おい奈美！？」

俺（の体）は慌てて奈美を追いかけた。

しばらく行くと奈美が何かを睨んでいる。

奈美の隣まできて、前を見るとゴミ箱とゴミ袋が並んでいる。そして一番奥にある焼却炉の前に海王寺を含めた数名の女子が奈美を怯えた目で見ていた。

「何をしているの貴女達。

下校時刻はとっくに過ぎた筈よ。」

奈美の声はいつもより低く声が震えていた。

「べ、別に私たちはぁ、日直さんがもうゴミ箱を空にしてくれたからぁ

こっちにゴミを捨て方が良いかなっと思ったからぁ捨てに来ただけだよぉ。

だからそんな目で見ないでぇ。」

「そ、そうなの？」

んー？何か変じゃないか？
普通こんな時間まで残っている事態おかしいのに、［今ゴミを捨てに来てま～す。］なんて明らかに矛盾している。

「・・・・・・僅かに息が聞こえる。」そう呟くと、俺（の体）は焼却炉まで行き、蓋を叩きはじめた。

「おい！！そこに誰か居るか！？」明らかに奇行だが近くまで来ると確かに呻き声が聞こえた。何故か海王寺は俺の手に腕を絡ませた。

「ねぇ～。何してるのぉ？
そこには誰も居ないよぉ？
そんな事してないで、凛華と帰ろう～☆」

俺は男だがコイツの声気持ち悪い。
海王寺はモテるらしいけど、
みんな海王寺のどこがいいんだ？

「・・・・・・・・せ・・・」

「え？なぁに？」

「離せ。」

俺は恐ろしく低い声を発した。俺とは思えないほどだ。

「え？何でよ。」

不機嫌な声を出し、信じられないような目で俺を見る海王寺。

「離せと言っている。」

「ヒッ！？」

海王寺は目をこれ以上開かないぐらいまで見開いた。

俺は、昨日降った雨で出来た水溜まりに俺の顔が写った顔を見て驚いた。

俺は鷹のように殺気立った目をしていたのだ。

これ、本当に俺なのか？

自分が自分ではないような気がした。俺は暫く海王寺を睨んだ後、俺（の体）は焼却炉のふたを開けた。

「・・・・痛っ・・・・・・」

ボロボロになった土屋がそこに収まっていた。

「コレはどうゆうこと？」

奈美はボロボロの土屋を見て、手を震わせ、唇を噛み、顔をしかめて彼女達に問う。

「私知らないよぉ。」

海王寺は首を振った。「それでは、もうとっくに下校時間を過ぎているというのに、此処にゴミを捨てに来ているというのはどうゆうことだ？」

すると海王寺は顔を歪め、言い逃れをしようと口を動かそうとした。だが海王寺は二つの殺気に完全に怯えてしまっている。

「お、覚えてなさい！」

海王寺は本性を剥き出しにして走り去った。

他の女子も此方を睨み、海王寺を追いかけていった。

俺（の体）は溜め息を吐くと、土屋を焼却炉から出して寝かせた。

『ハア・・・・体の主導権をお前に戻す。』

声が消えると、俺は思いっきり尻餅を突いてしまった。

「安心したの？ほら」

奈美が手を差し出した。

俺はそれを掴んで立ち上がる。

「サンキュ。

はぁ。まずは土屋を保健室まで運ばないとな～」

「そうね。保健の先生、まだいるかしら？」

そうだった。
もう下校時間過ぎてんだった。

「他の先生なら職員室にいるだろ。
それにしても厄介なことになったな～」

「そうね。このことは私に任せて！！」

奈美は珍しくウインクをしながら、綺麗な笑顔でそう言った。
俺にとってはキモいんだけどな。
だが奈美の笑顔がすぐに消えて不思議なものを見る顔になった。

「・・・・・土屋さん？・・・・」

奈美の目線の先には、土屋が立っていた。
だがその姿はまるで人形のようだった。

「私は、何もできない。
勉強だけが取り柄なの。
だけど、誰も私のこと認めてくれなかった。
がんバったノに、どウしてコんなメ二アうの？」

土屋の声が時々人間より低い声になる。
どうしたんだよ！？土屋！？！？

「コんな、こンナ目ニアうなラ、
ワタシナンテ、

死ンデシマエバイインダ！！！！」

その瞬間、土屋から暗い紅の爆風が吹いた。

「ぐはっ！！」

「キャアッ」

俺と奈美はその爆風に吹き飛ばされた。

「奈美！！！！」

奈美は頭を打ってしまい気絶してしまった。

風が止んだ。

俺は恐る恐る、土屋を見た。

「なっ何だよ！？あれ！？」

ギィァアアアアアアアアアア

そこに土屋は居なく、代わりに暗い紅の怪鳥が雄叫びをあげていた。

第一話　俺　中編　二（後書き）

読んで頂き有難う御座います！
お楽しみ頂けましたか？
自分でも書いてて、暗いと思いました。

次からは明るくするつもりです。

第一話　俺　後半　一（前書き）

だいぶ遅れてしまって申し訳ありませんでした！！！

理由はテスト、展覧会と続いてしまったため

それと第一話後半部分の大幅変更も。

しかもまた二つに別れてしまいました；；

本当に遅れてすいませんでした！

いま実を言うとテスト期間なんです；；；；

第一話　俺　後半　一

目の前には現実では有り得ないモノが空にいた。
天に紅を広げた怪鳥
なにもかもを貫きそうなクチバシに
俺なんか引きちぎりそうな大きな脚、
象おも切り裂きそうな鉄のような爪に
鋭く生を感じさせない紅い目
よく見れば暗い紅は濁っていて、その羽は炎のように揺らめいている。

何だよ！！？？これ！？

この世にあんなものいるのか？死を思わせる地獄の不死鳥ようだ
紅い死の目に俺は吸い寄せられるように不死鳥を見入っていた

そういえば土屋は？土屋はどこだ？
土屋を探すが俺の心の奥底でアレが土屋だと感じていた。いや伝えている。誰が？
再びあの怪鳥に意識を戻す。何度見ても灼熱と死を思わせる紅い怪鳥がクチバシを大きく開けていた。
その中には徐々に紅い紅い炎が大きな玉になっていく。
その炎の玉は俺の方に向けられ発射される。

「ぐう！！！」

俺は飛んできた火の玉を横へ避ける。

ヤバい！
俺は危機感を覚え、奈美を背負って後ろを向く。

えっ？校舎がない？ゴミの山？
周りをよく見渡してみる。
どこも見渡してもゴミ。
ゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミゴミ！？
現実では有り得ない景色。濁った紅い空
家ほどの大きさになった焼却炉それを中心に広がる広大なゴミ箱と
ゴミ袋の迷路
また非現実的なモノ

立ち止まっていると非現実なモノの一つである怪鳥がコッチに向かってきていた。

殺される。

俺の本能が警鐘を鳴らす。

逃げろ

生き残る手段は逃げるしかない。
炎の玉は恐ろしく熱いのか、炎の玉が当たった近くのゴミ袋やゴミ箱はドロドロに溶けていく。

走る

走る

走る

とにかく走る走る走る走る走る走る！！！走るしかない！！！
走って校舎まで出なきゃ！！！！！
だが何処まで走ってもいっこうに校舎は見えない。しかも複雑な迷路を進んでいるため真っ直ぐ校舎にいけない。
どんなに走っても走っても走ってもゴミの山しか見えない。
此処から出られないのか？
いつまでも続くゴミの迷路は俺に困惑と混乱を与えた。

と、とにかく今は逃げないと！！！

後ろから怪鳥がまた炎の玉を放つ。
道を塞ぐくらい大きい炎の玉はどんどん俺に迫ってきていた。

ヤバいコレ避けきれない！
俺はとっさに右の道に飛び込んだ。
俺は前を見た。

右の道は行き止まりだった。
ギィアアアアアア！！！！！！
後ろから嫌な声が聞こえた。とっさに後ろに振り返る。

ヤバい！閉じ込められた！！！
来た道を塞いだ怪鳥はその鋭い爪を俺に向けて下降してくる。
もうダメだな・・・・・・
俺はゆっくりと目を閉じた。

ガキンッ

ガキンッ？
あれいつまで経っても爪がこない？
恐る恐る目を開けた。

！！？？？？

『・・・・・・クッ！』
目の前に着物を着た男が、短刀で怪鳥の爪を受け止めて立っていた。

って誰！？

『龍斗！！！腰を抜かしている場合か！！死にたいのか！！！！！』

「は！？あっそうだった。」

『あっそうだった。ではないだろ！！何をいつもの調子で言っている！！！早くその場から離れろ！！！！』
でもどこに逃げれば・・・・・・・・・
あっ！！あそこに穴が！！！
俺はその穴に奈美を放り投げて、自分もそこに入る。
。
男はそれを確認すると怪鳥を押し返して、俺達がいる穴に飛び込んだ。

「ふぅ〜」

穴の先はゴミでできた洞窟のようなところだった。
怪鳥は入って来れないから、此処は大丈夫そうだ。

奈美を寝かせ、ちらりと男の方を見た。

男の髪は俺と同じ黒だが、サラッサラッなストレート。
腰までに伸びていて、後ろで纏めて紫の紐で結んでいた。

顔立ちは、二十代後半の俺って感じだが目は鋭い鷹の目。
右目は包帯で覆われていた。

何でだ？・・・・・・・・・未来の俺？

いや待て俺よ！！！
着ている服は時代劇の侍さんがよく着ている感じの紺の着物じゃん！！！！
腰には刀が挿してるじゃん！！！！！
それにほら足ないし、半透明だし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・って

「嫌ぁあああああああ！！！！！」
『！！？？？』

「ゆっゆゆゆゆ幽霊！！！！！！」

有り得ない！！！！！？？？
さっきから非現実的ばかりだ。

そういえば、さっき俺の体乗っ取ったのって幽霊さん（仮）？

『ああ。』

・・・・マジでアンタが？

しかもなんで俺の思ったことが分かるの？

『丸聞こえだ。あと俺は幽霊ではない。お前の足を見ろ。』

足？

俺の足からは黒い霧と共に包帯が出てきていて、それは幽霊さん（仮）の体に続いていた。

「何だよ？コレは・・・・・・・・・・」

彼は幽霊ではない・・・・・・・・・・・・・

『コレは俺がお前である証。

俺とお前はひとつの魂。

俺はお前の膨大な魂のせいで残ってしまった人格

俺は　橘　劉（タチバナ・リュウ）

『お前の《前世》だ。』

劉は俺の指してそう言った。

第一話　俺　後半その二（前書き）

もはやコレが私のペースなんだなと立ち直り始めた今日この頃。
でもこれから速度をあげるよう頑張るつもりです。
今回はいつもより長いです。
では、どうぞ。

第一話　俺　後半その二

『お前の前世だ。』

「お前が俺の・・・・・・・前世？」

前世・・・・・・・・・？？？？？

前世とは、俺が《橘　龍斗》として生まれる前に、この世で生きていた時の自分のこと。

つまり劉が前世と言うなら劉が俺であるということになる。

「ちょっと待て！

それっておかしくないか？

俺の前世としては、お前は俺と性格がちがい過ぎないか？」

『そのことに関しては後で説明する。

とにかく俺は橘　龍斗の中に《残った前世の人格》であり

《第二の人格》だ。

つまり俺はお前自身ということになる。』

「もう一人の僕的存在ですか！？？」

よくアニメや小説とかで出てくるもう一つの人格ってやつですか！

！？？

『そんな感じだ。』

俺二重人格になっちゃたってこと！！？？

『初めからだがな。』

「ぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？？」

マジですか！！？？

『マジだ。だが俺のことよりまずこの世界、邪界を出なければな。』

劉は辺りを見渡し、俺達がゴミの洞窟に入って来た穴を見つめた。
怪鳥が壁を叩く音が聞こえてくる。
そういえば、劉のインパクトがデカすぎて自分が今危機的状況にあることを忘れていた。

「なあ、劉何なんだよあの怪鳥は！？」

『簡単に説明する。
アレはある《この世に在ってはいけない力》に当てられて、人間が変化したものだ。《この世に在ってはいけない力》を《邪》といい、人間の魂が《邪》に当てられると《邪鬼》となる。』

アレ元々は人間！！？？
んじゃ怪鳥が土屋だと感じていたのは！！？？？

『あの怪鳥は土屋　ルレだ。俺は力が貯まるまでお前に知らせてい

た。』

アレが土屋・・・・・・・・！？
彼女の魂に何があったのかは分からないが、彼女がアレと同一だなんて、信じられなかった。
あのとき感じてはいたけど、心でずっと否定していた。

『邪鬼は魂が消えるまで破壊行動を繰り返す。』

「なぁ、魂が消えたらどうなるんだ？」

『存在そのものが消える。』

劉は周りにある黒い霧を指に絡めながら、続ける。『魂が消えた者は、体も消滅し、
あらゆる文献からも名が消え、
この世の者達の記憶からも消える。
創(はじめ)からいなかったかのように・・・・・・・・・・』

『ここから出るには、方法は二つ。
一つは、このまま魂が消えるのを待つか
一つは、土屋　ルレを元に戻すか・・・・・・・・・・・・』
そう劉が言ったら、後ろから怪鳥が壁を突き破り、顔がこちらに入ってくる。

『チッもう来たか。とにかく、
土屋　ルレの魂、

橘　龍斗の魂。後者を選べば、お前は今までの日常どころか、前世の記憶に苦しむことになる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・お前自身の問題でもある！！

お前が選べ！！！！』

俺か、土屋か、
そんなの決まっている・・・・・・・・・・・・・・・俺は一人の人間の存在を見捨てるより！！！

「俺は・・・・・土屋を戻したい！！」

非日常に巻き込まれた方がましだ！！

『そうか。その言葉、後悔するなよ。』

劉は、やはりといった感じの顔をしながら、俺の額に人差し指と中指を置いた。

『土屋　ルレを戻すには、アレを倒さなければならない。
それには、魂の力が必要だ。それは、《魂の掟》で前世と今世の記憶が交わらなければ、力は使えない。
とにかく時間がない。
俺の記憶とお前の記憶の間の扉を強制的に開ける。』

劉はゆっくりと指の間を徐々に広げ始めた。

「痛っ！！」俺の頭の中に何かが開いた感覚がし、それと共に目に

は見えない映像が見えてきた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

まず見えたのは、刀を構えている着物をきた男が二人。
その男達は、豪華な着物をきた中年の男性を護るように囲っている。
町はシーーンっと静まり返っていて、微かに鈴虫の声が聞こえる。

俺は、男達に刀の先を向けていた。

俺？いや多分、なんとなくだけど、劉だと思う。
俺は今、劉の記憶を見ているんだ。

劉が呟く。

“こいつが裏で攘夷志士共を支援している貴弍衛門か・・・・・”
中年の男が叫んだ。

“誰かあ奴を斬らぬか！！！！”

それに応えた二人の男達が劉に斬りかかっていく。

劉は、そいつらの刀を表情を変えず受け止めた。

“やはり、周りにいるのは攘夷志士共だな。”

またポツリッと呟く。

ここから恐ろしい光景が広がっていった。

刀を振るう劉。刀が舞うごとに

血飛沫がはじけ、

男達の体の一部が飛び、

この京の町から二人の男の命が散った。

劉が人を殺した・・・・・・？

こんな事をするはずがない！！

劉も俺なんだよな？

俺は劉なんだよな？

俺が人を殺した・・・・・・・？

何故？・・・・・・・それは・・・・・・・・・・・

“ききき貴様！！？？何者！！！？？？

“新撰組の人斬り”

“は？”

“普通の隊士が斬れない、隠れた者を斬る者”

冷たい声と共に貴弐衛門はこの世から去った。

劉あんたは、・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

意識が戻ったあたりで、なにかが溢れてくる。

だけど、なんか頭がボーっとしている。
なんだろう？体の中に力を感じる。

俺の髪が伸びる。
無意識に眼帯を外すと、右目を包帯が覆う
くせっ毛を残したまま伸びた後ろ髪を包帯が結う。

俺の姿は、半分俺、半分劉になっていた。

意識を戻すと、目の前で、怪鳥が壁を完全に突き破って、中に入っ

てきている。

『気が付いたか！！』

劉の声が俺の中から聞こえた。えっ？劉？どこなの？？

なんで劉の声が俺の中から？

『今俺は半分お前と同化して、俺はお前の中にいる。』

なんで！！！？？？

『説明は後だ。龍斗、自分の中に力を感じないか？』

「？ああ。なんとなくだけど。」

『なら、お前の中にある力を思いっきり出してみろ。』

やってみるか。俺は手を前に突き出し、劉に言われた通りに力を押し出してみた。

すると手から勢いよく黒い霧が吹き出て、それに当たった怪鳥がゴミの壁まで飛ばされた。

「なっなにコレ！？」

『それが、お前の力だ。龍斗。

その感じで刀をイメージして、

聖霊武器召還と叫んで見ろ。』

コレが俺の力！

分かった。やってみる。手から力を押し出し、霧を刀に変えるイメージをする。

「――聖霊武器召還！！！――」

手に柄の感触が伝わる。

霧は柄が真っ黒な鋭く光る刀となった。

「――現創刀（ゲンソウトウ）――

――黒龍丸（コクリュウマル）！！！――」

俺の手には、黒い柄の鋭い刃をした刀が握られていた。

「ホントにできちゃった！！！」

刀を俺は両手で持って、前に構える。

そして、刀から怪鳥に目線を変えると怪鳥が突進してくる。

『龍斗！まず右に半歩避けて、羽根を斬れ！！』

「斬れって、俺にそんな力ねぇよ！！！！！」と言いながら、俺は、劉が言ったのと同じように、半歩右に下がって、羽根に向かって刀を振るった。

「熱っ！」

怪鳥からの熱すぎる体温感じながら、怪鳥の羽根が宙に跳ぶのが見えた。

羽根が斬れた！！？？

普通あんなモノを斬るには、それなりの力が必要だ。
でも、感触があまりない。
斬れた羽根は、赤い煙を上げながら消えていった。

『邪鬼は、人間が、邪でできた邪殻を纏ったモノだ。
邪殻を人間の体を傷つけずに取れば、その者は、元に戻る。』
なるほど。あれは、土屋の体が変化したものじゃないんだ！

「じゃあ、どんどん斬ればいいのか？」

『元の人間を傷つけてしまったら、どうする。
見ると頭に体が有るようだ。
首を狙え。大概、あそこを斬れば、全ての邪はなくなる。』

体を傷つけずにっか・・・・・・
了解！！

怪鳥は飛べなくなったからなのか、こちらに向かって、無数に炎弾を打ってくる。

クソっ！！！あれじゃ近づけない！！！

『右っ！！！次は上に跳べ！！！』

俺は、劉が教えてくれる通りに体を動かす。
少しずつだけど、確実に近づいている。
伏せて、跳んで、
右に避け、左に避け、
炎弾を避けていく。

『次は壁を作って、前に跳べ。』

壁を作る？さっきの刀みたいにか？

壁をイメージして、また手から黒い霧を出す。

真っ黒な壁ができ、壁が炎弾を防いだ。

それによってできた煙に紛れて、怪鳥の首めがけて、前に跳ぶ。

「はあああああ！！！！」

怪鳥の首を斬った。

「やった！！！」

「ギィアアアアアアア！！！！！！！！！！」

耳にくる断末魔を上げて、変な世界と共に怪鳥は消えていった。

「土屋は！！？？？」

世界も俺も元の姿にに戻った時、土屋がいないのに気が付き、辺りを見渡す。

『土屋　ルレなら此処だ。』

劉はそう言いながら、自分の足元を指した。

土屋はぐったりと眠っていた。

『疲れてはいるが、体、魂ともに無事だ。』

「よっ良かった！！無事で！！！」

奈美も無事だ。
みんな無事でほんとに良かった！！！！

『ほら、眼帯をしろ。
そしてさっさと帰るぞ。』

劉は腕を組ながら、呆れた様子だ。

「にしても劉っていいにくいなぁ。」

俺は、龍斗で劉は劉・・・・・
(俺の前世らしいが) 年上っぽいし・・・・・・

んー、劉さん、幽霊、先輩、相棒・・・・・・いやそれは、漫画と被る。

なんか、劉って俺とは正反対だけど、なんとなーく顔が似ている。
兄弟って感じ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

「兄貴！！！兄貴って呼んでいいか！！？？劉！！！」
『何だ。唐突に。まぁ別に好きに呼べ。』

よし！兄貴の許しを得た！！！

俺は土屋を救えたことに安心し、兄貴が新たな家族になったことを喜んだ。
これから、様々な事が大きくなることなんて、夢にも思わずに・・・・・・・・・・・

「んじゃあ、これから宜しく！兄貴！！」
『ああ、宜しく。龍斗。』
こうして、俺の非日常は、始まった。

【第一話、俺・完】

第一話　俺　後半その二（後書き）

やっと第一話が書き終えることができました！

もう一年以上経っていることに気が付きましたが、こんな長さで大丈夫なんでしょうか・・・・・・・・・・・・・・

しかも２０００ヒット越えていました。

なぬぅ！！！？？？

本当に読んでいただき有難うございます！！

感想をくれた方々も感謝いたします！！

―斬影―は速度を変えて投稿するので、これからも宜しくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9336g/

―斬影―

2010年10月10日12時34分発行